文化福岡

〔福岡県立図書館報〕

## 特集

# 知的生活の東西

古野清人

本館及び福岡県図書館協議会では、一九五四年度の読書週間にあたり多彩な週間行事を展開したが、そのなかでも最も感銘を以て迎えられたのは、ロック・フェラー財団の招きによる訪米の旅を終えて帰朝されたばかりの、九大教授古野清人先生をお迎えする公開講演会であつた。先生はつかれを知らぬ強健さで八幡、久留米、田川、門司の四会場を巡り講演行脚を続けられたが、そのニュアンスあるユニークな話題はどの会場ででも聴衆を魅了せずにはおかなかつたもののようである。こゝに特集として田川会場における録音を筆録し、大方の諸士におくる。

(K)

私の小さい頃は今日のように図書が普及しておりませんで、私は筑前の玄海に沿つた漁村で育ちましたが、勿論学校に図書館はありませんし、また漁村自体にも教科書を除いては本らしい本はありませんでした。しかし私は偶然といゝますか町屋に育つていましたから少年世界とか日本少年、また小学校の上級生になつてからは武侠世界というような雑誌位は読んでおりましたが、そういう環境のなかでは勿論漁師の同級生などは殆んど本など読まないという状況でありました。

たゞ私がそういつた時に本を読んだことは今から考えると役に立つたような気が致します、というのは日本少年とか少年世界は仮に別にしましても、武侠世界というような雑誌を読んでおりますと冒険心や想像がたくましくなりいろ〳〵な探検でもやつて見たいという気がしたもので、また東京へでも出て納豆売でもして苦学して勉強して見ようという気にもなつたものです。当時博文館が少年世界を出し、現在の実業之日本社が日本少年を出しておりましたが、そういう関係から今から四十数年前に既に振替で本をとることを覚えまして、今でも覚えているのは東西名士発奮の動機という当時としては相当高価な本を読んで、偉い人になるのには一苦労だなと感じたことがあります。

私は中学は折尾の東筑で、それを出て京都の三高から東大に入りましたが、東大を出る頃に関東大震災がありまして東大の図書館がやられました。それを改築するというので、その時私の恩師の姉崎正治先生が館長でしたが、――姉崎正治といつてもお判りでない方もおられましょうが、高山樗牛の親友で、むしろ樗牛の研究で有名な姉崎潮風――この人は国際的な学者で欧米にも度々行つておりますが、そのお友達の梵語の学者、即ちサンスクリットの学者であるウッドという人を通じて、その人の兄さんがロックフェラー財団の顧問をしておりましたので、大学が図書館に困つているのは気の毒だからそれでは財団から寄附しようということになつて、その当時はやはり国粋主義の傾向があつて外国から金をもらつてしかも国立大学が図書館を建てるということにはいろいろ反対があつたのですが、結局、ロックフェラーの寄附申出でには全然条件がない、無条件で呉れるのなら貰つておけという姉崎先生の主張が通つて図書館ができました。この図書館は現在でも日本では一番大きいと思うのですが、書庫全体がスティールになつていて各フラーヌは全部曇りガラスで明るくしてある、規模や設備の点でもこれだけの図書館はないのですが本の冊数でも現在では国立大学では一番多い三〇〇万近くになつていると思います。ともかく、いよいよその開館式をやりました時に各国の外交官たちも来たのでありますが、図書館ができたことを一番喜んで呉れたのはベルギーの公使で、次はイギリスの大使であつたということを先生があとで申しておられました。それは、ベルギーは御承知のように第一次世界大戦でドイツに蹂躙され、ドウヴアンなどの有名な図書館が全部焼かれて了つたという関係もあつて日本に新しい図書館ができたことを本当に喜んで呉れた訳です。それからイギリスの大使は有名なチャールス・エリオットという学者でありまして、この人は外交官であると共に非常に優れた学者で、殊にインドにおる間に、現在のインドの宗教はインド教でありますがそのインド教と、現在インド本国にはもうなくなつている日本の仏教の元である仏教、これらについて大きな本を書いており、また日本に来てからはいろ〳〵な軟体動物などの研究もしている学者でありますが、その人がまた非常に喜んで呉れたのです。そして日本で本当に喜ぶべき立場にあるような人があまり喜んでいない、いゝかえると図書館が大学教育に持つ重要性がはつきり判つていなかつたように思われます。

そういう時代に比べますと今日は全く隔世の感があり、僅か三、四十年の間に非常な飛躍をとげていると申せましよう。殊に終戦后はアメリカの指導もありますが我国における大きな仕事として図書館の充実がとり上げられ、国家はアメリカにおけるコングレスライブラリーの真似でありますけれども国会図書館というものを作つて、全国で刊行される書物をそこに集め、世界的な規模のもとに近く数十億を費して大きな図書館をもとの赤坂離宮から移して建てるということであります。このように国家が大きな図書館をもとうとしているのと併行して公共図書館が非常に発展し、また今年になつて学校図書館法が成立して学校図書館が大きな地位を占めるようになりました。最近も西日本の学校図書館の会議がありましたが、小・中・高の先生方、あるいはまた県の指導者の方々が非常に熱心に研究をやられており、しかも全国に亘つてこの数カ年の間に約八十パーセントが普及している、いゝかえると小・中学校で図書館を

目次

知的生活の東西…古野清人…(1)
われもまた些かの図書館学を……菊池 祖…(4)
ニュース……(8)

持つていない学校は僅か二割程度になつているということは敗戦后の日本としましては驚くべき著しい進歩であります。

そういうめざましい図書館の進出ぶりに比べて高校、特に大学関係の図書館は非常に貧弱でございまして、またそれを管理している側でもそういう熱意が割合に少いようです。現在小・中学校の図書館で指導を受けた生徒が大学に入る頃には、おそらく現在の図書館では満足しないだろうと思います。しかしそういう点から考えて現在では上級学校ほど立ちおくれでありますが、これもやがて大いに改善されることと考えられます。

これに反して九州、殊に福岡県内においては公共図書館が非常に立派に運営されていると思います。私は当地（田川）に参りましたことは始めてでありますが、こういう立派な図書館ができていることも始めて知つたのであります。アメリカにおきましても公私立の図書館は、東の、古いアメリカ人のいる所謂ヤンキー地域よりも、むしろ西の新しい地域に発達しているということを、アメリカ全土の図書館を視察して来たある北ヨーロッパの館長が申しておりました。それは図書館をつくる時に従来のいろ〳〵な行きがかりに捉われず思いきつてそういう文化施設をする地盤がある、いゝかえると財的にも物的にも充分そういつたことをやれる基盤があるのであります。殊にアメリカでは石油の出る地域、例えばテキサスとかカリフオルニアといつた地域は目覚ましい躍進を遂げておりまして経済的に恵まれると文化設備を盛んに作つていく傾向があるように思います。

私は終戦後ある外国語学校の校長をしておりましたが、これからの学生には矢張り図書館学の初歩を指導してやることが親切であり、また勉強する上に組織的であると思つて、文部省に図書館学なるものを必須科目にするから認定して呉れといつたことがあります。しかしそのころの文部省の役人は図書館学なんてものは聞いたことがないからそういうものを必須に認めることはできんというので、それからいろ〳〵折合いました結果文献学という名前で必須科目に認められたような次第でありました。また日本人は図書館ならば図書館の建物を建てるとそれで一応終つたように考えるクセがありますが、そういう設備をつくつたら最初に協力した人々、公共図書館の場合ならば市民の方々があくまでも協力して盛り立てゝ行くといつた考え方が必要のように思います。

ところで現在、日本ほどおびたゞしい本の出ている国はあまりないのですが、アメリカは別として、イギリスでも非常に紙の値段や生産費が高くて、現在ではそうやたらに本が出せないようになつています。日本では新聞でも一〇〇万以上の購読者を持つているのが多いのでありますが、ヨーロッパにはそういう風な新聞はない。そういう点からいゝますと、日本のいわば紙と活字で出版される印刷物を通じての文化活動は世界的なものであろうと思つております。そこで、こういうおびたゞしい汗牛充棟もたゞならぬ書物をどういう具合に読むかということが、読書週間などの場合問題にされなければならないと考えます。

「フランス敗れたり」という本が出まして戦後日本でも有名になつた、アンドレ・モーロアのことであります。これはフランスがどのようにして敗れたかを書いておるのでありますが、私が面白いと思うのは、フランスは第一次大戦のときには圧倒的な航空機をもつていてドイツをしとめた。一方アメリカは百万以上の軍隊を送つたけれどもこれは大した役割は果していなくて、別にたくさんのガソリンを送つたのが飛行機を飛ばし、機械化兵団を動かして側面からドイツ軍を沼のなかに叩き込む非常な役割を果したのであります。その赫々たる戦果を収めた当時のフランスの指導者たち、例えばジョッフルとかフオッシュとかペダンとかそういう偉大な指導者たちはこれに耳を藉さなかつたのだけに満足している。それでその後ドイツに対抗するためにつくらせたマリーヘンというものに対しての如きも非常な満足の意を表している。この時に独り若い將校であつたルゴールが、フランスは高速度に機械化しなければ次の戦争では完全に敗れて了うといつたのでありますがプラーグの軍事指導者たちはこれに耳を藉さなかつたのであります。それで今度の第二次大戦と共にヒットラーのいわゆる電撃作戦、アンゲンブリック・クリーグによつてマリノ線は突破され、首府パリは陥されて了い、パリを去つてペダンを主席とする所謂ヴイシー政権なるものが成立したのであります。

そういう風に戦争の技術といゝますか、そのやり方も時代を追つて変つた様相をとつて行く。そういうときに古い指導者はどう動くかゞ判らないという状態がでてきます。日本の場合にも同様のことが云えるのでありまして、日本が開戦と同時に真珠湾をひつぱたいた。私はホノルルに行きました時に真珠湾とはどういうところであろうかと自動車をとばして山の上から、或いは近くから眺めて見ましたが、実に入口が狭く、中は佐世保の軍港の何倍かの広さをもつていて、あの入口を陥されたら全艦隊駄目だろうと思われましたが、それが作戦が実にうまく行つた。次に日本海軍はまたマレー沖でイギリスの不沈艦プリンス・オブ・ウエルス及びレパールをやつつけた。その時の指揮官は藤吉という大佐でありまして、その後この人に会つた時に、日本海軍の航空隊は戦艦をやつつける為に三〇年もの間苦労して来た、それが実際に攻撃して見て不沈艦といわれたプリンス・オブ・ウエルスをやつつけた時の喜びは非常なものであつた、というようなことを云つておりましたが、それと同時に彼は、結局いつかは自分のやつた術でやられるのだ、だから日本の戦艦や大巡洋艦などは対空防衛のやり方を急いで変えなければ嘘だということを海軍省に進言したけれども、緒戦の華々しさに酔つた海軍首脳部はそれを聞かず、かえつて彼に対する同僚や先輩たちの嫉妬もあつたのか、とにかく私が会つた時にはある地方の航空隊に廻されておりましたが、そういう風なこともあります。また今度の朝鮮での事変を考えましても、ある場合には北鮮軍が釜山の近くまで押しよせ、ある場合にはまたもり返して鴨緑江の近くまで南鮮軍が押してゆく、しかし結局は三十八度線で戦線が膠着して了う。これは結局、お互に相手の力を計りながら機械化が高速度に進んだ場合の消耗戦という非常な特殊な状態が生みだしたのであろうと思いますが、これは人間の社会には一つの法則というか、頭では解決できないいろ〳〵な問題が次から次へと起つているということであります。従つて我々の知識といいますか知性のようなものは要するにノラクラなものでありまして、いわば帯に短かしたすきに長しという具合にすぐ現実には役に立たないのであろうと思います。動物の本能はある定められた状況あるいは環境の中でしか働かないのですが、人間の知識は時にビシヤツと合わなくとも、過去を考えまた將来を考えるという多くの柔軟性をもつています。それを利用しないで自分の知識を固定させてしまつているとすればそれは信仰に近い、いわば動物の本能に近いものになつてきます。それでは固く石膏化してゆとりのとれないものになつて了います。これは戦争の場合だけの問題ではなく、人間の社会でも常にそういう現象が起る訳で、そういう知性のもつ欠陥を補うための新しい技術を人間は知つています。社会現象や自然現象を絶えず理解してゆくことが必要であると思います。



さてアンドレ・モーロアは、第一次大戦のフランスとイギリスが協力しているころ、イギリスの指揮官にれい属していろ〳〵な工作もやつていた人ですが、彼が「生きて行く一つの技術」とでもいゝますか「アル・ド・ヴイヴル」という本を書いていますが、そのなかにいろ〳〵問題を提供しております。そのなかに読書術というような題で読書を三つに分けて考えています。一つは日本的に云えば乱読とでもいゝますか、いわゆる悪癖としての読書というようなもので、それは例えば文化人あるいは知識慾の旺盛な人によく見られるヤタラに活字を捨いたがるくせ、目の前にあるものは何でも、よその家にいつて新聞があればそれを見、自分の家でも手当り次第にそこいらにあるものを読む。そしてそういう風に何か見ていなければ淋しく不安であるというような傾向、こういう人は学者にもよくおりますし、秀才の学生などには私のところに来てもすぐそこらあたりの週刊雑誌などを手にとつて、話している間でも絶えずものを見ていないと気がすまない、こういうのが一種の乱読であります。

しかしそれは読書として最上の方法ではないと思います。次に考えられるのは慰安としてまた娯楽としての読書でありまして、それは人間が働いて働いて働きぬくというような生活を続けていつたならば身体がもてない、身体がもてなければ頭の方ももたない、そんな時に切換えることも無論できる訳ですが、しかし人間の頭というものは相当の労働に堪えうるものでありまして、大ていの人は本なんか読むと頭がつかれすぎるという風に考え勝ちでありますが、そんな時にそこいらの小説を読むというようなことも慰安としてよく、また繪の本を見て楽しむことも必要であると思います。

以上は慰安としての読書でありますが、第三の生活と共にある読書法は仕事としての読書でありまして、できるだけものを纒めて読むということであります。アンドレ・モーロアは、小説や随筆を書いたり旅行記を書いたりする場合の読書の時には、本の中の必要な項目を裏に書きぬいて頁を打つておく、そして何か必要な時にそれを見て必要な個処だけを読むといつたやり方をする、というようなことを書いておりますが、そういう三つの読書法のなかで結局第二、第三の方法が併用される、いいかえると一つは多読、一つは精読ということになるのだろうと思います。「芸術は永く人生は短し」とリシヤの諺にもある通り、われわれの学問は非常に永く歴史的に人から人へと続けられて行くものでありますが、個人の生命はいかに長壽をしても百年に足りない。そんなときにできるだけ纒めて本を読む辯をつけることが学問に志す人ばかりでなく一般に望ましいことであります。例えば世界の洋の東西を問わず偉い人の作品は一応読んで見ることで、日本の昔の教育のように論語などを棒読して暗記させるというような、たつた一つの本を基本にするようなことは人間の考え方を狭くするやり方だと思います。「論語読みの論語知らず」という諺がありますが、これは論語だけでは判らないものが世の中にあるのだという風な解釈もできるでありましよう。

皆さんの中で例えば文学に志す方が日本文学などをやる場合、——専門であると趣味であるとを問わず——やはりある程度時代を別けてそのなかの重要なものを読むとか、特に好きな作家のものをできるだけ多く読むとか、そういう地盤を作つておいてからいろいろ読む方が、やたらにそこいらの小説を集めて筋だけを楽しむようなことよりも読書法としてはよりよいのではないかと思います。例えばドストエフスキーが好きならばそれをできるだけ読む、そして彼の時代的な背景、製作の年代、それに彼がロシヤの首府に住んで何を考えてそんな作品を書いたかというような社会的な背景をも考える。一面では彼がテンカン持ちであつてその前兆があると倒れないようにベッドのなかでジツと寝ている、そんな風な個人的な心理経験を知れば、彼の作品のなかに神なり悪魔なりがのり移つたりのにつかれたような人物が現れて一人の作家のこともわかる。そういう風にくることもあり、できれば評伝を読むことなども望ましいことであります。

また一面においては彼の生きた社会、正に西欧に不信であり、自らの民族的な文化を目指しているロシア・ロマノス王朝の末期、若いジエネレイションは西欧的なものを受入れながらそれには満足できない、しかしそういう自分達の理想をこの社会で実現するような地盤がまだできない、そういう悩みのなかにある時代を認識する必要があります。そしてドストエフスキーも亦現状に満足できず、革新的な運動をやろうとして捕われて断頭台に立つのでありますが、まだ首を切られない前に皇帝の勅令が下つて釈放されるのであります。これが彼の一生を支配している一つの場面でありますが、そのたつた一瞬間、断頭台に立つた刹那に自分の髪の毛が全部真つ白くなつたような気がしたといつています。それからシベリアに流され、囚人としていろ〳〵な経験をし、そういう生活のなかで彼は宗教について考えております。彼は「新しいヨーロッパの科学文明から考えると無神論にならざるを得ない、しかし自分の体験した不思議な世界、そして現在の囚人としてのもろくはかない運命を思うと神がなくてはおられない」といつておりますが、そういう心の葛藤のなかで彼が考えているキリスト教は、例えばトルストイの考えているようなそれとは違うのでありまして、トルストイは聖書のなかにあるモーセの十戒式の道徳を通して人類が高まつてゆくというような世界を考えておりますが、ドストエフスキーのは自分が生きている社会のキリスト教、いゝかえればカソリックともプロテスタントとも違う、いわゆるギリシヤ聖公会（グリーク・オーソドックス）の信仰に近いのでありまして、それを最もよく現わしているのがカラマーゾフの兄弟のなかのアリヨーシヤの考え方であります。

私はこういう文芸論をやる積りではありませんでしたが、要するに一貫した読み方によつて、社会的な背景を見比べながらその個人経験と関連させて作品を読むということ、その点で成功するならばその他の場合にも応用がきくということであります。また、浅く、広くということも結構ですが人生の短いことを考えるならば同じ読書でもそういう風に経済的にやつてゆくことも必要であると思います。仮に芸術について考えて見ましても、一つはラール・プール・ラール、アート・フオア・アート・セイズ、芸術のための芸術というような個人の主体性における観賞の行き方と、もう一つはラール・プール・ピース、アート・フオア・ライク、人生の為の芸術というような二つの見方があると思います。十九世紀の作家、例えばオスカー・ワイルドなどの芸術論は前者でありまして、そういう風に美の世界すなわち芸術の全体であると考える人があります。これに対して人生のなかでその全神格全パーソナリテイの一端をなすための芸術という考え方、例えばトルストイのような人もあります。前者の考え方も非常に魅力のあるものでありまして、例えば楽しい小説というようなもの——尤

は勿論分離できないものですがやはり物質の改善によつて精神性を高めてゆこうという方向を辿つており、その点でそれは西欧的であります。先刻も申しました通り、ロシアの十九世紀における民族運動者――ドストエフスキーもその一人でありますが――のナロードニテイのような運動が起りましたのも今日のアジアの場合と殆んど同じような考え方でありまして、西欧文明になり切つて了うのは嫌だがそういうものを基盤にして次の文明を造つてゆこうというゆき方であります。アジアの立ちおくれた国家民族だけでなく、更に立ちおくれているアフリカやその他の地域の少数民族が今日いかなる文明を造ろうとしているのかと申しますと、やはり西欧的なものを基盤にした文化、いゝかえると彼等やまたわれ〳〵の恐らく全部、要するに生きとし生けるものが目指しているものは、この現実の社会においてわれ〳〵の生活の標準をいかにして高め、生き易く、喰べやすくして行くか、そういう方向へ進もうとしている訳であります。だからその否定しているものと肯定しているものの間には若干の矛盾があり、アジアの場合には封建的な過去の意識と新しい目標との間にスレがあります。それでわれ〳〵は何か一種の心の安定を失い、不安な満ち足りない気持をもつています。殊に日本の場合、敗戦の結果過去の日本的な社会組織が一応崩されて新しい方向を辿ろうとしているけれどもその方向にはまだ馴れがない、そういうどつちつかずの生活をしているのが現状でありましよう。このことはいろ〳〵の点からいえますが、例えば新しい憲法に示されているのは、夫婦とその子供を中心にしたものを社会の基本的な単位と考える小家族制度でありますが、これに対して過去の日本民族の伝統的な考え方は、夫婦以外に親や兄弟場合によつては親族までも含めた大家族制度で、それが日本の経済的、社会的、精神的なつながりのもととなつています。要するにわれわれはそういう制度の下に一応安定した世界を形造つている、（勿論この間には嫁姑の争い、心の葛藤などの問題もありますが……）そして日本の場合それは父系でありますから祖先は父から父へとたどつてゆくやり方であります。従つて父や祖父、曽祖父などの配偶者は対象に含まれますが、例えばその曽祖母の実家の系統は別に辿らないのであります。しかしそれはある集団を維持して行くのにはよいのですが、あまり小さな社会にかたまりすぎてそこにあるモラールというものはそれ以外にのびない。子供が電車に乗つた時など、お母さんこゝへいらつしやいといつて人を押しのけてでも自分の母親を坐らせようとするけれども、その場合一緒に乗つているお互に社会を形造つている他の人のことは考えない。また商家の丁稚なども常にその一家を中心に考えるから、自分の主家をどうしてもうけさせるかだけを考え、そんなにもうけることによつて社会がどれだけ困るかということは考えない。そういう欠点がある訳であります。で、こういう考え方をなくすために小家族制度に切替えたのであります。

このように憲法を変えたのも、つまりは人民の意志ですが、しかしそれではいまの若い者が仮にその方向に進んでも全体が満足しません。また若い人達も少し良心的に考えると何かそこには安住できないような気分がある。そればかりでなく一面において親の経済生活に不満ができてくる。殊に今日の日本のように英国や米国のような社会保険制度が完備していない社会では、折角養つた子供が自分たち夫婦や子供のことばかり考えて親や兄弟をみて呉れない。そういうことに不満をもつのは当然であります。仮に経済的に扶養して貰う必要のない人の場合でも感情的なつながりという点でなお物足りない。まして日本のような、アジアでは進んだ工業国であるけれどもやはり六〇%位は農民層であるというような社会では、百姓は年をとれば能率のあがる仕事ではありませんから、営々として働いて来て老後になつて自分の子供からみて貰えない、そういう社会をいゝ社会だと思う訳は決してありません。そういう風に大衆を見渡すと何かこの社会の変革に対して満足できないものがある、いいかえると新しい社会に対する不安な気持がそこにある。どこにも安住の世界がないというような感じを持つ人が多いだろうと思います。また政治的に見ても民主々義というものが最も大きな基盤でありますが、こういうものにわれわれはまだ馴れがない。民衆はあらゆる点で民主々義を誤解していも小説が純粋な芸術といえるかどうかわかりませんが――の中でも矢張り一種のファンテイジの世界を描いてそのなかに没入してゆくような行き方があります。そしてそういう芸術の世界を造りあげてそこから人生を見なおす訳でありまして、ワイルドも「結局人生が芸術を模倣するのであつて、芸術が人生を模倣するのではないのだ」というようなことをいつています。イギリスに有名なターナーという画かきがいまして、ロンドンの人間はターナーの絵によつてはじめてロンドンの霧の夜の美しさがわかつたといわれています。白秋によつてわれ〳〵が水郷柳川の美しさを知つたのと同じでありましよう。われ〳〵が芸術に美しさを感ずる場合に、そこにあるウソは多角的ではありませんがある種の美的な真実を教えて呉れます。絵画や音楽の場合その純粋の度はなおさらでありましようが、作品の場合も同様であります。その場合われ〳〵はフイクションによつて創り上げられた型のなかに美しさを認めることができます。

例えば歌舞伎もそうでありまして、我々はその中におけるあらゆる仕草を知つておつて、その決められたわくのなかで名優が演出をやる、そういう時にドヂを踏めば半畳を入れてやる、という具合にその型を楽しんでおります。そういう場合の人工的な世界が芸でありまして、例えば国十郎という役者は非常に眼の大きな人でありますが、その芸談のなかで「ハツタと相手をねめつける時には一度目をつぶつてからパツと開け」というようなことをいつておりまする。そうすると目の小さい人でも舞台ではつきり判り、まして目の大きな人だと本当ににらみつけているように見える訳で、そういう虚構の世界を造つてそれをお互に楽しむ、そういう芸術もあつていいと思います。しかしそれが芸術だけでなく文化一般ということになりますと芸術も全体のなかの一つに考えられなければなりません。そんな風に、芸術だけをわけて考えないで文化という枠のなかの一つとして考えれば、やはり本筋としてはあくまでも人生の為の芸術であるといえます。まして読書のような場合、そういう点から考えて読書のための読書ではなく、人生のための読書であるという風に考えることが正しいのではないかと思われます。

ところでわれ〳〵は、空間的にはある一つの場所と、時間的にはある日付のなかにおかれているのでありまして、いわゆる国際的な社会に対する感覚的なまた認識的な馴れは少いのですが、日本という一民族の共通的な意識や感情、行動性というものは身近に感ずることができます。日本が嫌で海外に行く人はわずかですから別問題としまして、そういう立場からいゝますと、現代のしかも日本という立場からわれ〳〵の文化を全般的に考えていくということになります。そしてそういう基盤から更に人類あるいは世代を考えるような方向へ向つて行きます。ですからある場合には日本の民衆のなかのある人生の片隅から人生を描くイツヒ・ローマンといいますか私小説のようなものもとり上げられてよいと思います。また自分の心の経過を書いておるような、例えばフランスのマルセル・プールル、アメリカのヘンリー・ジエイムスなどの心理小説も、ある時代のある処に生きている人間の一つのゆき方として把握することができるだろうと思います。従つて常に世界性を持つ文学、ヴエルテル、テレプールなどばかりを読むのでなく、もつといろ〳〵な面を摂取し自分を肥らせて行く、全パーソナリテイの一部だけを極度に肥大させてゆくやり方でない、いわばもつと健全に人間の完成を目指す方向に自分を導いてゆくような読書が必要ではないかと思います。

そういう点と関連して、こゝに与えられている「知的生活の東西」というようなことについて暫くお話したいと思いますが、われわれの民族的な伝統あるいは文化の相違というものは本来ヨーロツパとは大きな違いがあります。殊に少くともあつたのであります。殊に近代的な西欧というものは東洋的なものと全く別に考えられ、多くの人々は東洋に何か深い精神性のようなものを考え、ヨーロツパには物質性を考えて人間の型を二つにわけようとする。イギリスの作家で永くインドにいたキツプリングのように「東は東、西は西、そしてこの二つは相合うことがないであろう」といつたような時代があつたことを認めるのにヤブサカではありませんが、しかし現代の文明はそういう方向にだけ動いているのではなく、肉体と精神と

# われもまた 些かの図書館学を

(4)

菊池 租

## 〔その七〕 ―鍵預り―

数年前ある県立図書館の開館式（精確にいうと新館落成式）があつて、その式次第のなかに書庫鍵授与というのがあり、県知事（たぶんその頃はまだ教育委員会は発足していなかつたろう）から館長が見事な筥に納められた書庫の鍵を拝領する一コマがあつた。そのときは、すごく古風なことをするものだなあと思つただけだつたが、この頃みつけ出した『博多櫛田宮御文庫創立始末覚書』をみると、図書館長をはつきり『鍵預り』と称しているからおもしろい。この言葉が全国共通だつたかどうかはしらないが、すくなくもあの儀式ははつきりした記録上の根拠をもつわけである。

この文庫については小野則秋氏の日本図書館史に記述があり、文庫の利用者が増加したことが原因となつて閉止するに至つた『我が国図書館史上の珍例』とされているものであるが、この覚書乃至残存する文庫図書目録その他関係者の顔ぶれなどから推すと閉止の理由はそう単純ではないらしい。文庫自身の性格も簡単に公開文庫としておさえてしまうのは問題であるとも思われるので、近く調査を進めたいと思つているがともかく、この覚書の中に指令書や図書貸出規定が記録されており、神職代表への申渡書には『櫛田社内文庫致成就書籍迫々相集候に付天野土佐（註、神職の一人）へ請持申付文庫鍵共々預け作法書相渡候条云云』また天野土佐への申渡書には『依而文庫幷鍵共々其方へ預け一切壱人請持に相立候云云』とある。ついで櫛田神社文庫出納之定には『御文庫の鍵二通有之分一つは天野土佐預り置一つは年行司手許に預り置候事』、そしてその但書に『年行事預り分は備非常置候事』とある。これだけでは強いていえば単に鍵の保管を依嘱したとも考えられるが、蔵書の受入も貸出もすべて鍵預りの所管とされ、且つ『御文庫破損所漏所等の儀平常見かじめ別而風雨の砌鍵預天野土佐心懸け見廻り云云』、そしてその但書に『但御書物御文庫之内にて雨漏に掛り又は粗略に致置鼠切等致出来候はば鍵預の可為越度候事』とあるのを見れば、一鍵預りは文庫の最高管理者であつて正に今日の図書館長である。それにしても図書館長にこんな罰則があるのはおそろしい。

少しわたくしに不似合いな文献的考証に走りすぎたが、ここで鍵預りのことをいい出したのは今日の利用中心の図書館時代においてそのために図書館人の鍵預り的性格が少し軽視されすぎていはしないかと思われるからである。今日の図書館人がかつての書庫の番人から脱皮したのは結構であるが、『書庫の番人』という言葉にこだわるのはいささかインフエリオリテイ・コムプレクスにわざわいされている疑いがある。近代的図書館の仕事として必須の文化的社会教育的諸活動やレフアレンス・サービスのメカニツクな装置、図書館協力組織による機能の巨大化、近代的ツールの導入による事務の能率化など、近代化の面で推進さるべきものはむろん多々ある。併しそのはなやかさに眩惑されて図書館人本来の性格である『鍵預り』がどこかへけし飛んでしまつてはいないか。

## 〔その八〕 ―図書館学の魅力はどこに―

さてアメリカの図書館員は図書館学校の教科についてどう批判しているか。

Alice I. Bryan, The public Librarian, 1952に、図書館員から図書館学校当局が重視しすぎていると批判された教科、軽視しすぎると批判された教科の表がある。それによると前者、いいかえるともつと軽くあつかつていいといわれるもの、恐らく時間数をへらしたり内容を簡単にしたりであろうが、それが図書館史、図書館行政、図書史及印刷史、受入、製本、目録、分類、書誌並レフアレンス、官庁刊行物、逐次刊行物、図書館管理、図書館建築等であり、後者即ちもつとしつかりやれというのが、図書選択、図書館財政、非図書資料、学術語、人事管理、分館管理、成人の読書興味、児童の読書興味、読書心理、読書指導、読書社会学、特殊奉仕、社会的コミユニケイシヨン、PR並弘報、応用心理（図書館用）、調査法、インターンその他の諸教科である。もつともこの紹介は少しあらつぽすぎていて、各教科について重視、軽視の比率、回答者の職種別、男女別の統計数字まで紹介しなければ精密な

に云つてはならない、例えばある種の信仰では迷信が非常に多い、これは考えものだというようなことは一切云つてはならないということでありましたが、つまり宗教は本人が選択するものであつて教育者が壇上に立つて教えるべきものではない、というのが撤底したアメリカの民主々義的な考え方の一つである訳であります。こう考えると民主々義というものは自分の権利と共に大きな責任をもたなければならない、いいかえると自分のパーソナリティを大きく広く作つて行くことを前程にしなければ結局は衆愚政治にすぎなくなると思うのであります。私は現代の日本の政治はまさにこの衆愚政治の状態ではないかと思います。

一つのエピソードですが、御存知のように東京裁判の時に大川周明が東条の頭を叩いた。その時の一コマが寫真になつて外誌に掲載され気狂い扱いをされましたが、彼はその時にデモクラシイ・イズ・デモクレイジと云つたのであります。つまりデモクラシイとは民衆が気狂いになることだと云つた訳ですが、その記事には逆に彼がクレイジだと皮肉つております。要するに人間はいつも自分の生活を中心にそれを護つて行くという立場に真剣にならなければ、民主々義などというものは絶対によくなるものではないと私は思います。現在では何かといえばすぐ大立廻りをやり、小にしては村会から大にしては国会に至るまで理屈ばかり云つていて仲々話が纏まらない。これでは賢い村長がいて一人で村をやつて行く方が反つてよい位ですが、結局公けのために私情を捨てる訓練ができていないので私利私慾のために争つてばかりいます。そしてそういうものが民主々義であるというような考え方を助長しています。私は徒らにアングロ・サクソン民族を礼讃するものではありませんが、しかし彼らの政治的なトレイニングはすばらしいものであります。我々も征来天皇主義という一種のイデオロギーの下における訓練はもつていたのでありますが、それが今日殆んど役に立つていない。そして新しい政治的な制度を作りあげたけれどもそれに対してはまだ馴れがない、という具合に寛大に見逃すこともできますが、結局は例えば大家族制度というような一つのモラールを更に拡げて、小さい円から大きな円へと移るような訓練ができていない、これがわれ〳〵の今日直面している悲劇の根本ではないかと思います。日本人とかフランス人のような民族は非常に感覚の鋭い民族であつて、理屈っぽくてうるさ型であります。ですから政治面でも感情的なものが常に動いて、大きく社会全般を考えるというような訓練が足りません。そこへいくとアングロ・サクソン民族は、何も彼等が一朝にしてそういう政治を作りあげた訳ではありませんが、いろ〳〵な革命を経、多くの血を流して学びとつたものは、要するに政治的には小異を捨てて大同につくということであります。これはアメリカでも同じことでありますが、政党でも大きく二つにわかれております。フランスのあるジャーナリストが美んで、「たつた一人の専制政治も淋しいものだが、三人もいると煩さい。これを二つに還元してやつているアメリカ人は政治の天才だ」というようなことを云つておりますが、これから他の国でもそういうのができてくるかも知れませんが、組織の力をもち得るという点において現代のアメリカは恐るべきものであります。アメリカの個々の人間は特にいわれて左程偉いのではないように思いますけれども、しかしあの大きな組織の中で一人々々が社会に適応して行くやり方は恐るべき才能であります。こういう点ではあるいはソ連や中共なども同様ではないかと考えられます。

私は四、五年前にロンドンにいたことがありますが、当時は始めて社会党が政権をとつてアトリーが首相であつたころでありまして、夜になると訪問もできませんので映画館をあちこち見ておりましたが、あるときニュースを見て感じましたことは、たまたまチャーチルがデンマークに呼ばれ、デンマークの皇帝をはじめ大歓迎をやつておる場面でありました。チャーチルは例のヴイクトルを意味する右手のVを示しながら画面に現れましたが、世界大戦において、あれだけの勲功を立てたチャーチルのそういう光景を見ながら一人も拍手をする者がいない。むしろ中にはシーツというようなことを云う者もいる。ところが同じニュースが、富裕階級の方が多いと思われる地域の映画館で上映されると状態は逆になつて来て、チャーチルが王宮の中にはいつて行くような場面になると、案外ものごとに感情を現わさないと云われているイギリスの若い女性がキヤーツと大声を出して騒ぐ。ところが一度びアトリーの現れる場面になるとシーツというような風に云う。と云うことは、イギリスの国民がいかなる党派が自分たちを護つて呉れ、いかなる党派が自分たちの敵であるかということをよくわきまえているということであります。そういう風に自分たちの立場を理解し、自分達の所属している階級の利益をはつきり意識しているけれども、一旦それ以上の敵を迎えた場合にはこの二つは一緒になつて、社会党にもし指導者がなければ反対党のチャーチルを立ててでも対戦をやつて行く。そしてそういう場合にはその指導者の下に動く。こういうことは優れた政治的な訓練によるものでありまして、こういうものをわれ〳〵はまだもたない。今後は恐らくもつようになるでありましようし、またもたなくてはウソでありますが、現在の我国では例えば自由党などが伸びる訳はないというような情勢のなかでも自由に羽を伸ばしているという状態であります。今日多くの大衆は自由党の政策それ自身ではないにしても、彼等の過去における政治的な罪悪を憎んでいます。そしてこれを建て直さねばいかんというようなことを考えている人は実に多い。しかし彼等政治家はたとえ解散してもまた自由党が大多数を占めるだろうという自信をもつています。ということは、彼等が大衆の意志とか意欲とは別個に政治がやれると思つている訳で、国家としてまた国民としても甚だなげかわしい現象であります。このことは国民が自分たちの政治に責任をもつという立場から考えるとそうあつてはならないのでありますが、現在そこまで行つていないことは大きな悲劇でありましよう。

そこで、文化というものは、それをつくり上げている国家の性格が影響していると考えることができます。中共がよくなつて来ているのは中共という国家内部の現象でありますが、日本が敗戦の後徒らに富めるものは富み、貧しきものは益々極貧に化しているという状態は、国際的経済の一端としても無論認めなければなりませんが、現象としてはあくまでも国内の現象であります。こういう状態を来していることは矢張り国民の責任なのでありまして、こういう点においてわれ〳〵は自らの責任を回避しているのではないかと思います。

話は元へ戻りまして、今日洋の東西を問わず作り上げようとしている社会生活は、精神と肉体あるいは物質が一致した世界を造る。つまり理想的な文化を造り上げるにはどうしても物質的な期待の下に立たなければならないということがはつきり判つたのであります。そしてそういう世界は可逆的でない、即ち社会の法則としてバックすることができないのでありまして、良かれ悪しかれわれわれはそういう方向を辿つて行くのであります。その場合いかに良い方法をもつて良き方向へ向うかということが問題でありましよう。



るのであります。民主々義といわれる今日の傾向を見ますと自分の権利だけを主張すればいゝように皆考えています。しかし本当は平等という原理が民主々義の根本精神なのでありまして、各人は正当な社会生活を営む限りその自由を奪われることはありません。泥棒をしても自由という訳ではありませんが人に気兼ねしなくてもよいということでありまして、例えば言論とか信仰とかの自由を持つております。仮に私がこの席上で共産主義はいゝものであると主張しても、皆さんが反対されることも勿論自由でありますが、私はその故に国家から自由を奪われることはないのであります。

ところが信仰の自由の場合を考えましても、何を信仰してもいゝのだという考え方が支配的になつています。戦后の混屯とした状態のなかで社会は今迄のような釣合いがとれないでいる、というのは親を失つた子、子を失つた親或いは夫を失つた妻というような大きな釣合いのとれない層ができている。これは単に社会生活だけではなく、経済生活にも大きなそごを来している訳であります。そういう社会に信仰の自由があつても、例えばキリスト教という教育の地盤がある外国と違つて、日本では明治政府以後宗教的教育を学校でやつていませんから――外国でもフランス革命以後の自由平等を主にした教育のなかでは宗教教育はしてはならないことになつていますが――過去における宗教の弊害から逃れることはできても、いざ宗教の自由ということになるといかなる宗教の教育をも経ていないので宗教のよしあしを判断する力がない。そういうことで今日では数多くの所謂新興宗教が起つて、その流している社会的害毒は非常に大きなものがあると思います。それらの大部分は、心と肉体というものにおける人間を考えないで、精神だけを強調する。病気をしてもお前の行いが悪いのだとかあるいは祖先の祟りだとか、そういう精神的なものに切換えて了つて、現実の肉体の働きを考えずに医学の目標としているようなものとは反対の方向へ導いて行こうとする。殊に年をとられた方に多いのですが、こゝ七、八十年の間われ〳〵は宗教を選択する訓練を経ないで宗教の自由を与えられたので、すぐ目の前に現れるものに捉まつてしまい勝ちであります。その選択に批判がないばかりでなく社会の混乱がひどくて物質的にも困つています。しかも時には医療のお金がない。そういう時に近所に精神だけでなおるというようなものがあれば矢張り藁をもつかむ気持ですがつて行こうとする。それで自分が幸福になれば問題はないのでありますが、更に自分の社会生活を落して行くという状態であります。

これは人から聞いた話ですが、日露大海戦のときに、秋山という参謀が実質上の作戦をやつたのでありますが、その人は欧米の教育を受けていて戦争は科学であるという信念の下に行動していたのであります。さてバルチック艦隊が現れて彼我の大海戦という時に、相手のバルチック艦隊が全滅して日本艦隊が殆んど無疵で残るということは考えなかつた。相手をやれば自分の方もやられるという風に考えていた。ところが海戦は奇跡的に大勝利に終り、秋山はこの時にはじめて天祐ということを知つたのであります。つまり国家の興亡に全責任をもつていた秋山が、自分の科学的な頭で作つた世界がそこに実現せずに勝つた。その時にはじめて世の中には神もあるということを感じた訳であります。ところでその時彼の同僚の佐藤鉄太郎とか小笠原長生というような人はすでに日蓮宗にコチコチであつた。で今更同僚の宗教の中に頭を下げて行く訳にも行かず、彼は後に大本教に入つたのであります。しかし結局は脳梅毒で死んでその末路は甚だ哀れなものでありましたが、要するに宗教的な訓練のない者が大きなショックに出くわすと案外コロリと参つてしまうというようなことは、お互の身近によくあることであります。て、あゝいう平素賢いことを云つている人がえらい宗教に入つたものだなとよく感ずることがありますが、精神生活に対する馴れのない人間は過ちを犯しやすいということであります。

このように信仰の自由というものが仮に形式的に与えられたとしましても、それを働かせるのは互の責任なのでありまして、終戦后アメリカが宗教の教育についていろ〳〵云つておりました時代に、宗教とはどんなものだということは学校で教えてもいいが、この宗教よりこちらの宗教の方がいいのだというようなことは絶対

観察のお役にはたたないが、『些かの図書館学』だからこのへんで勘弁していただく。ただついでに、もつと重視が必要と主張される教科目を主張者の職種別（館長、司書、司書補）男女別に見てその六職種に共通する順序にならべてみると、五種共通が人事管理、四種共通が読書心理と応用心理、三種共通が図書館財政、二種共通がPRで、図書館行政、成人の読書興味・非図書資料がそれぞれ一職種となつている。

近代図書館の先進国たるアメリカにおいて図書館員の研修として必要な知識についてこのような要求がなされているとき、図書館人の『鍵預り』的性格の復活を説くのはいかにも時代錯誤とみえよう。併し図書館としても民族としても国家としても歴史と伝統を異にする日本の図書館乃至図書館人が、近代化の点こそアメリカに学ぶとしても何もかもその真似をしなければならぬことはない。むしろ民族社会の中の存在として日本の図書館はその歴史と伝統においてヨーロッパにこそ類似を見出すべく、従つてまた範を求むべき面も少くないのである。ドイツの図書館学はそのアカデミイ性の故に魅力うすきものとなつたとはいえ、なお且つ図書館学といえば図書館史や書誌学の知識がその中心である。イギリスの司書検定試験では書誌文献の知識が最も多く求められている。書誌学や古文書学の知識は日本の図書館員の大部分において欠けているが、民族文化財がひろく全国各地に所在し、古い生活記録の中から新しい民族の歴史が書きかえられねばならぬ今日の日本において、図書館人のこうした知識の欠除は放置しておいていいものであろうか。

『鍵預り』は決して単なる書庫の番人ではない。かの天野土佐は黒田藩の『国学功者』青柳種麿と肩をならべて『学問心懸け』と認められ、文庫開きには七日間にわたる神書の連続講義を行つている。学者であり思想家である。さればこそ開館二年目に新築された『書籍手入所』は事務室でもあり『書籍暫時拝借の仁指控拝被』の場所即ち閲覧室でもあり、同時に『社家中生立の者稽古之場所』即ち講堂でもあつた。『鍵預り』は蔵書の保管を中心としてこれらすべての責任者である。蔵書の保管は図書についての知識を基本とする。『鍵預り』は図書館人の象徴である。『鍵預り』に必須の知識もまた図書館学の魅力でなければならない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

今日いかなる精神生活を唱えている方でも、やはりその燃料のなかには物質があるでありましよう。私はそういうものがなければおかしいと思うのですが、自分たちの住いている世界観、人生観と共に、各々の立場において物質生活を改善しながらしかも文化を楽しんで行くという考えで社会生活を営んで行くことがよいと思うのですけれども、優れた哲学者や大宗教家から見ればそれは世俗なことかも知れません。しかし大衆の生活というか、人類の生活というものは概してそうなのでして、それに大聖者、大偉人のいうようなことを要求するのは無理であると思います。仮に私に要求されてもそれに従うことはできません。結局われ〳〵が文化生活を豊かにするためには先づ社会をよくし、経済的な機構のなかで経済の改善を計り、国家の政治を改善していくより外に術はない。そういうものを回避して徒らに夢の世界に閉ぢこもることは、或いは宗教であり文芸であり芸術であろうとも、或いは広く学問であろうとも、それは一種のエスケービズムであり、仮に知識人がこの現実からファンテイジの世界や白昼夢のなかに逃避することになれば、現実はますます悪化こそすれよくなることはない。いゝかえると東西の文化というものは今日ではもう既に一洋化している。そして根本的には知性を中心とした世界、すなわち科学の世界をもつて進化しつゝあるということができるであろうと思うのであります。

従つて過去の東洋、西洋の文明はしばらく別にして、現在においては二つの文明は既に一つのものであります。そしてわれ〳〵は家族生活を中心にした世界へのノスタルジアを越えて、家族を愛するが如くに隣人を愛し、国家の同胞を愛し、更に飛躍して人類全般を愛して行く。そしてお互の連繋のもとに、各民族の立場からその文化の特色を生かしながら全世界を通しての一つの文明を作りあげなければならないのであります。もしそうでなくて、例えば原子科学というようなものが人類の殺リクのためにのみ発達して行くものならば人類は滅亡するよりほかはない。われ〳〵人間は大体楽天的にできているのでありまして、そういうことを文章にでも書くような時には緊張してこりやいかんという風に考えるのですが、普通生活をしている時に原子力恐るべしというようなことを朝から晩まで考えているような人は少ないと思います。アナトール・フランスがその作品のなかに、難波してやつと船に救いあげられると共にもう濁酒かなにかをやつておる光景を書いておりますが、そういう風な楽天的なところがある。戦争でも隣りの戦友は倒れても自分は生き残るかも知れないと思うから勇んでトツカンができるのでありまして、もしこの逆だつたらなかなかそういうことはできないものであります。そういう、人間のもつている測り知るべからざる楽観主義は、封建制度というガンジガラメの専制政治のもとでは一種のアキラメのような生活になります。中国においては浚法子、いたしかたないんだということになり、ロシアの場合はニチエロ、もう仕様がないんだということになる訳であります。しかし別に千年も万年も前からある民族の性格というものは実はないのでありまして、それはある社会のある精神のもとにつくられた性格でありますから、国の政治が変つて新しい意慾をもつようになるとそれは変つてくるものであります。ですからわれ〳〵も今日ではよかれ悪しかれ科学主義を中心にした文明の発展を計るべきであります。殊に機械文明というものを自分たちの生活のためにつくつて行く、それも精神生活をこわすようなものでなくむしろ促進して行く手段となるようなものが必要であつて、われ〳〵各人が責任をもつて自分を律して行くような社会をつくる。そういう点から考えると仮に読書というようなものでも、広く人生一般の目標のなかに生きて行くことが望ましいように思います。

甚だまとまりがありませんでしたが、読書週間に際しまして、感想をすこし述べさせて戴きました。〔九州大学教授・西日本図書館学会々長〕（文責　木村）

## ニュース

### P・Bリポート資料室の開設について

西日本各地の諸有用技術関係者から期待されていろP・Bリポート資料室は、すでに備付資料の選定を終り、五月一日開室を目標に目下整備を急いでいる。この資料室は、国立国会図書館と福岡県の応援のもとに、関係諸社の協力を得て九大工学部応用力学教室三階の約三十坪の一室に設けられるものであるが、これは同リポートの国会図書館に到著している約十万件の複製のうちから、最も西日本地域に即応している三千件約十四万頁を選定委員会において選定し備付けるもので、この複製と輸送に要する費用は総額三百万円、施設・設備・人件費等地元側で負担する金額は約百万円にのぼつている。この資料室に勤務する係員二名の増員も既に県会で認められ、国会図書館での複製作業も着々進行中なので三月末頃から続々到著の見込みとなつた。この資料の目録は全資料の完備を俟つて印刷に付し関係方面に配布の予定である。

なお、このリポートの重要性については今更述べるまでもないことであるが、今次大戦后旧ドイツ国の特許をアメリカ軍が接収したもので、世界における科学の進歩に貢献するところ甚大である。殊に我国の技術面に対する利益は約三十年の空白を埋めるに足ると云われており、国内にこの資料室が設けられるのは名古屋、大阪、福岡の三カ所のみであるので十二分の活用が望まれている。

### 本年が最後の司書講習
#### 九州は福岡と宮崎で

図書館法で規定されている司書及び司書補の講習はいよ〳〵本年を最後に打切られることとなり、今後は大学における単位の修得によつてのみ資格が附与されるが、その最後の講習会が九州地区では福岡と宮崎で開催されることとなつた。福岡での開催大学は難航の末例年通り九大教育学部で開催することに決定、宮崎ではほゞ宮崎大学に確定した。これにより今年迄まだ資格を取得していない図書館現職者の一掃を期しているが、学校図書館における司書教諭の資格取得のための単位にも六単位が流用できるので、その方面の参加も期待されており、盛会が期待されている。

### 本年の実務研究会終る
#### 福岡県公民館図協議会

福岡県公民館図書部協議会が例年県内各地で行つている実務研究会は、本年度は県内五カ所を予定していたが、そのうち行橋市会場の分を除いて全部終了、同市の分は町村合併の余波で来年度廻しと決定したためこれで本年度のスケジュールを全部終了した。

昭和三十年三月廿五日印刷
昭和三十年三月廿五日発行
編集兼発行人　菊池　租
印刷人　川涙作蔵
印刷所　流芳堂印刷所
福岡市東公園内
発行所　福岡県立図書館

# 福岡県立図書館 新着書目抄

1955年3月25日現在

| 書名 | 著者名 | 発行所 |
|---|---|---|
| **0. 総記** | | |
| 現代学問のすゝめ | 茅誠司編 | 大蔵出版 |
| 図書館職員の教育 | J・ヘリヤム・タントン 中村初雄訳 | 一橋書房 |
| 公共図書館の成人教育 | カール・トムセン外著 岸幸一訳 | 一橋書房 |
| 学校図書館資料の整理 | 日本学校図書館振興会 | 日本学校図書館振興会 |
| 学校図書館の読書指導 | 石田佐久馬編 | 福村書店 |
| 奇本、珍本、本の虫 | 庄司浅水 | 学風書院 |
| 日本の蔵書印 | 小野則秋 | 芸文社 |
| 官庁刊行物総合目録2 | 国立国会図書館支部図書部編 | 出版ニュース社 |
| **1. 哲学・宗教** | | |
| 月曜通信 | 柳田国男 | 修道社 |
| 世界大思想全集 11 | ヘーゲル・フイヒテ 真下信一外訳 | 河出書房 |
| レーニン全集 8巻上下巻 | レーニン全集刊行委員会 | 大月書店 |
| 心理学 | 吉岡修一郎 | 白水社 |
| 経営心理学 | 米山武 | 大蔵出版 |
| 若き日の信仰 | 田中耕太郎編 | 三笠書房 |
| 現代仏教講座 第1巻 | 亀井勝一郎外 | 角川書店 |
| **2. 歴史科学** | | |
| 歴史と現代 | 歴史学研究会編 | 岩波書店 |
| 万葉の時代 岩波新書 | 北山茂夫 | 岩波書店 |
| 日本封建制成立の研究 | 竹内理三編 | 吉川弘文堂 |
| 中世文化の基調 | 林屋辰三郎 | 東大出版 |
| 西洋史研究入門 | 井上幸治 林健太郎編 | 東大出版 |
| 赤い広場の窓 | F・ラウンズ 齋藤春雄訳 | 生活社 |
| 外国旅行案内 | 清水陸郎編 | 日本交通公社 |
| **3. 社会科学** | | |
| ソビエトの政治 岩波新書 | 前芝確三 | 岩波書店 |
| 日本の政治経済の新路線 | 国民の新聞社編 | 河出書房 |
| 明治政治思想史研究 | 石田雄 | 未来社 |
| 国と家 | 戒能通孝編 | 毎日新聞社 |
| イギリスの議会 | 木下広居 | 読売新聞社 |
| 総選挙の実態 | 蠟山政道外編 | 岩波書店 |
| 革命の歴史 | A・ランデー 藤野渉訳 | 新評論社 |
| 法律入門 岩波新書 | 戒能通孝 | 岩波書店 |
| 国民主権と天皇制 | 尾高朝雄 | 青林書院 |
| 日本に於ける外国資本 | 政治経済研究所編 | 東洋経済新報社 |
| 日本の独占 上巻 | ルキヤノヴア 新田礼二訳 | 大月書店 |
| 日本の人口 | 毎日新聞人口問題調査会編 | 毎日新聞社 |
| 職責権限ハンドブック | 日本能率協会事務管理研究会 | ダイヤモンド社 |
| 都市の文化 上巻 | L・マンフォード 生田勉外1名訳 | 丸善 |
| 数奇なる思想家の生涯 | 家永三郎 | 岩波書店 |
| 社会調査の方法 | 福武直編 | 有斐閣 |
| 質問紙調査法 | 続有恒 | 同学社 |
| 幼児の心理 | 波多野勤子 | 光文社 |
| 全国大学大観 | 旺文社編 | 旺文社 |
| 職場のための人事相談 | A・ギヤレット 武沢信一訳 | 同学社 |
| 公民館図説 | 小和田武紀 | 岩崎書店 |
| 日本社会民俗辞典 2 | 日本民族学協会編 | 誠文堂新光社 |
| 軍隊の歴史 クセジュ文庫 | ジョルジュー・カステラン 西海太郎訳 | 白水社 |
| **4. 自然科学** | | |
| いかにして問題をとくか | G・ポリア著 柿内賢信訳 | 丸善 |
| 世界の化学 1951 | 小竹無二雄 | 槇書店 |
| 変革の生物学 | サフオーノフ著 齋藤勉訳 | 青銅社 |
| 生命現象の化学 | 芦田譲二外編 | 朝倉書店 |
| パヴロフ | E・A・アスラチヤン著 栢植秀臣外訳 | 岩波書店 |
| 日本動物記 2 | 伊谷純一郎 | 光文社 |
| 発生生理学への道 | O・マンゴルド著 佐藤忠雄訳 | 法大出版部 |
| **5. 工学** | | |
| 生産管理ハンドブック | 野田信夫外編 | 河出書房 |
| 土木工学ハンドブック | 土木学会編 | 技報堂 |
| 原子力発電 | 阿部滋忠 | 丸善 |
| 無線工学ハンドブック | 日本電波協会編 | オーム社 |
| 化学機械装置カタログ集 1 | 中村梧一郎 | 八雲書店 |
| アセチレン工業 共立全書 | 村上恭平 | 共立出版 |
| **6. 産業** | | |
| 赤い歯車 | 松前重義 | 読売新聞社 |
| 稲作の経済構造 | 金沢夏樹 | 東大出版社 |
| 私は中国の地主だった | 福地いま | 岩波書店 |
| 農業図説大系 1巻 | 野口彌吉 | 中山書店 |
| ミチューリン農法による増産の記録 | 新潟県ミチューリン会編 | 蒼樹社 |
| 農業水利権の研究 | 渡辺洋三 | 東大出版会 |
| 石の鑑賞 | 久門正雄 | 理想社 |



| | | |
|---|---|---|
| 化学商品辞典 | 津田幹夫外編 | 同文館 |
| 貿易統計年鑑 1953年度 | 美濃部亮吉 | 東京教育研究部 |
| 自動車産業教育双書 | 松本一郎 布施道夫著 | 岩崎書店 |
| **7. 芸術** | | |
| 造形教育大辞典 3巻 | 倉田三郎外編 | 不昧堂書店 |
| モンマルトルの空の月 | 中川一政 | 筑摩書房 |
| 色名大辞典 | 和田三造 | 創元社 |
| 書道全集 9巻 | 下中彌三郎編 | 平凡社 |
| 板画の話 | 棟方志功 | 宝文館 |
| 昭和30年史 | 影山光洋編 | 雄鶏社 |
| 今日のフランス音楽 | 松本太郎 | 白水社 |
| 日本の民謡 | ラジオ東京文芸部編 | 緑地社 |
| 世界演劇史 | ロベール・ビンヤール 岩瀬孝訳 | 白水社 |
| ヒマラヤを語る | 今西錦司 | 白水社 |
| いけばな 伝統芸術講座 7 | 伝統芸術の会 | 河出書房 |
| **8. 語学** | | |
| ことばの研究室 Ⅳ | 日本放送協会編 | 講談社 |
| 故事成語諺語辞典 | 満留辰夫 | 一歩社 |
| 最新時事用語辞典 1955 | 末松満編 | 法文社 |
| **9. 文学** | | |
| 俳句への道 岩波新書 | 高浜虚子 | 岩波書店 |
| 芭蕉 | 山本健吉 | 新潮社 |
| 近代短歌史展望 | 窪川鶴次郎 | 和光社 |
| 春のだいち | 須藤春代 | 岩崎書店 |
| 村のエトランゼ | 小沼丹 | みすゞ書房 |
| 姉妹 | 畔柳二美 | 講談社 |
| むらぎも | 中野重治 | 講談社 |
| 現代日本文学全集 38 葉山嘉樹外 | 葉山嘉樹外 | 筑摩書房 |
| 魯迅の故家 | 周遐壽 松枝茂夫外訳 | 筑摩書房 |
| 杜甫 詩と生涯 | 馮至 橋川時雄訳 | 筑摩書房 |
| 現代中国文学全集 13巻 | 曹禺 奥野信太郎訳 | 河出書房 |
| ハツクスレイ研究 | 上田勤編 | 英宝社 |
| 葡萄の年 | リルケ 富士川英郎訳 | 新潮社 |
| 罪なき人々 | ヘルマン・ブロツホ 浅井真男訳 | 新潮社 |
| 悲しみよこんにちは | フランソワーズサガン 安東次男訳 | ダヴイツト社 |
| 創造と自由 | アルベエル・カミユ 矢内原伊作訳 | 新潮社 |
| フランス文学史 1 | G・ランソン、P・テユフロ 有永弘人外訳 | 中央公論社 |
| ロシア文学史 | 黒田辰馬 | 門脇書店 |
| **⊙児童図書** | | |
| 世界の子ども 9巻 フランス篇 | 下中彌三郎編 | 平凡社 |
| 魚とりと魚 | 檜山義夫 | 三十書房 |
| 現代世界学童美術全集 5 | 河出孝雄編 | 河出書房 |
| キヤラバン物語 小学生全集 59 | 塩谷太郎 | 筑摩書房 |
| 世界少年少女文学全集 12 | マロ 桜田佐訳 | 創元社 |
| 鉄の町の少年 | 国分一太郎 | 新潮社 |
| 夜あけ 朝あけ | 住井すえ | 新潮社 |